屎葛の歌

――万葉巻十六の歌をよむ――

古庄ゆき子

一

万葉巻十六に

苣(かはらふぢ)茨に延(は)ひおぼとれる屎葛(くそかづら)絶ゆることなく宮仕(みやづかへ)せむ　（三八五五）

という歌がある。

この歌については　茨のよみが確定していない。旧本に「葛茨」とあるのを「葛茨」の誤りとしたのは『代匠記』、「苣茨」の誤りとしたのは『万葉集新考』である。

従来フヂノキ（旧訓）、クズバナ（『万葉考』）、サウケフ（『万葉集新考』）、カハラフヂ（『万葉集全釈』）のよみがされており、現在も岩波日本古典文学大系本『万葉集』や『万葉集評釈』等は「かはらふぢ」とよみ、朝日新聞社日本古典全書本『万葉集』や『万葉集注釋』は「さうけふ」、小学館日本古典文学全集本『万葉集』は「ざうけふ」とよんでいる。『万葉集私注』は「サイカチ」とよんでいる。

あとに掲げるが、この歌の作者高宮王のいま一つの作品（三八五六）に婆羅門とか幡幢とかの外来語を使っているところからすれば和名「かわらふぢのき」（さいかし）を「サウケフ」と音字読みをし「屎葛」と取り合せているかとも考えられる。

歌意は「カワラフジにまといつき、ひろがり乱れている屎葛の蔓が絶えないように、絶ゆることなく、いつまでも宮仕えしよう」（日本古典文学大系『万葉集』四）であるが、「絶ゆることなく、宮仕せむ」の「絶ゆることなく」の比喩（序詞）に悪臭のためにヘクソカヅラの別名までもつ屎葛が葛茨にもっさりまとわりついている姿をもってしていることからくる意外性に激烈な笑いがこみあげてくる歌である。

この意外性は次の歌と比較してみれば明らかであろう。

降る雪の白髪(しらかみ)までに大君に仕へまつれば貴くもあるか　（巻十七　三九二二）

物部の八十氏人も吉野川絶ゆることなく仕へつつ見む
（巻十八　四一〇〇）

大君の　任のまにまに　この川の　絶ゆることなく　此の山の　弥つぎつぎに　かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠永に
（巻十八　四〇九八）

「屎葛」の歌はこうした宮廷人の宮仕えの誓言を前提としている。この正当な誓言では「永く仕へまつる」の「永く」の比喩は「降る雪の白髪までに」とか、「吉野川絶ゆることなく」「此の山の弥つぎつぎに」が一般であった。この歌はそこを「屎葛」をもってする。それだけでも十分珍奇であるが、それだけではない。この「屎葛」は「延ひおぼれとれ」ている状態のもので、それが「絶ゆることなく」の比喩となっているのである。痛烈さはそこにある。

『類聚名義抄』は「おぼとる」を「蓬　オホトル　ミタル」とし、「蓬頭」を「オボトレガシラ」とよんでいる。『今昔物語』に「頭ハ蓬ノ如キ也」（巻十一　九）「髪ヲボトレタル大キナル童盗人」（巻二十八　四二）とあるそれである。

『岩波古語辞典』は「オホはオボロ（朧）のオボと同根。さだかでない、はっきりしないさま。トレは朝鮮語t'o（髪）と同根か」とし、オボトレで「乱髪の意が原義」、「毛や蔓がからまって乱れている」様をいうとする。『万葉集全釈』は「オドロ（刺棘）と語源を同じうする動詞らしい」という。多くの訳者が「這い乱れている」としているが、『万葉集全講』や『万葉集評釈』の「はいかぶさっている」、「かぶさり乱れている」としているのが適切であろう。

「おほとる」は万葉集でこの歌以外に見ることができない。平安朝の女流の作品や『今昔物語』にみられることは、これが歌に使われることのない日常語であるためかと思われる

『枕草子』では、冬の薄を

冬の末まで、かしらいとしろくおほとれたるも知らず、むかし思ひ出顔に、風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう似たれ。（六十七段）

と乱れそそけた様で描き、『源氏物語』では

髪の裾のにはかにおほとれたるやうにしどけなくさえ剃がれたるを……（「手習」）

と「乱れ広がる」意で使われている外、

大路近き所におほとれたる声していかにとか聞き知らぬ名のりして（「東屋」）

と、声の様子（「しまりのない」）にも使われている。

「延ひおぼとれる屎葛」は這いかぶさり、みだれている屎葛である。

『古事記』には

なずきの　田の稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　野老葛

という歌謡がある。これはヤマトタケルの葬りに関する歌の一つだが、「野老葛」は

懸佩きの　小剣取り佩き　冬薯蕷葛　尋め行きければ
（巻九　一八〇九）

とみられるように、冬トコロを掘るには蔓をたどって探すところから、「追い求める」の比喩となっていたようである。この歌謡の場合も「死者の魂を追い求めるための所作」と考えられている。[注1]

一方では、もともと蔓植物が草木にまといつく様を歌った恋の民謡があって、その転化かともいわれている。[注2]

万葉集の歌では野老蔓や葛、さな葛など蔓植物が単なる風物としではなく、その蔓の行方知れず、どこまでも延びてゆく姿を、相手にしたい寄る恋の比喩として序詞に使われている。

藤なみの咲ける春野に延ふ葛の下よし恋ひば久しくもあらむ　（巻十　一九〇一）

真田葛延ふ夏野の繁く斯く恋ひばまことわが命常ならめやも　（巻十　一九八五）

山高み谷辺にはへる玉葛絶ゆる時なく見むよしもがも　（巻十一　二七七五）

真葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも吾無けなくに　（巻十一　二八三五）

丹波路の大江の山の真玉葛絶えむの心我が思はなくに　（巻十二　三〇七二）

大崎の荒磯の渡延ふ葛の彼方も無くや恋ひ渡りなむ　（巻十二　三〇七二）

木綿裏白月山のさな葛後もかならず逢はむとそ思ふ　（巻十二　三〇七三）

駿河の海磯辺に生ふる浜つつら汝をたのみ母に違ひぬ　（巻十四　三三五九）

入間道の大家が原のいはゐ蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね　（巻十四　三三七八）

上毛野久路保の嶺ろの久受葉がた愛しけ児らにいや離り来も　（巻十四　三四一二）

上毛野可保夜が沼の伊波為蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね　（巻十四　三四一六）

上毛野安蘇山蔓野を広み延ひにしものを何か絶えせむ　（巻十四　三四三四）

多くは無名歌や民謡の中にみられる比喩である。恐らくは農山村のくらしの中から生まれた発想であるためだろう。しかし、貴族社会の中でもその比喩は用いられてもいる。だが延ふ葛の　いや遠永く　万世に　絶えじと思ひて　（巻三　四二三）

皇祖神の神の宮人ところづらいやとこしくに吾かへりみむ　（巻七　一一三三）

高円の野辺はふ葛の末終に千代に忘れむ我が大君かも　（巻二十　四五〇八）

はふ葛の絶えず偲ばむ大君の見しし野辺には標結ふべしも　（巻二十　四五〇九）

のように恋の比喩から大君へ「とこしへに」、「千代に」、「遠永く」「仕える」比喩に転じている。ここにとりあげた苞葛に延ひおぼとれる屎葛絶ゆることなく宮仕せむ

もそうした一首である。

しかし、この歌の「絶ゆることなく」の比喩は「真くず」でも「玉蔓」でも「さね蔓」でもなく、「屎葛」である。「延ふ」でなく「おぼとれる」である。そこに戯画化がある。

二

この歌は「宮仕えせむ」にかかる比喩（序詞）と「宮仕」のあまりにおおきい異和によっておこる激列な笑いをもたらす。ところが従来そのようには読まれてはこなかったようである。

鴻巣盛広は

絶ゆることのない宮仕に譬へるものとしては、吉野川の清流などを材料とするのが例であるのに、刺だらけの　茨と、名を聞くだけに臭い感じのする屎葛とを以て、序詞を作ったのは随分ひどい話だが、そこに滑稽を蔵しているのであろう。高宮王はどういふ御方か分らないけれども、皇室に対する敬意を欠いてゐるといふ、批評を受けてもやむを得まい。

（『万葉集全釈』）

といい、また松岡静雄は

（三句までの序は）カヅラの縁によって絶ユルといふ語を導いただけではなく、高宮王（伝不詳）が朝廷に奉仕する誠意をもらしたのである。即ち同じく蔓性ではあるが、繊弱なる屎葛は、藤の幹にたよることによって僅に生ひ立ち、其の花も壮麗な藤とは比べものにならぬのは、同じく皇族ではあるが、微々たる自分が、皇室の庇護によって世を渡るやうなものであるといふ意味を含めたものと思はれる。表面の意義だけでは縦ひ物名を詠み入れたものとしも、余りに趣が乏しく、第二句のオホドレルという語が用をなさぬ。（『有由縁歌と防人歌』）

天皇あるいは皇室を　葛に例え、作者自身を屎葛に例えたとする読み方は古くからあるらしく『代匠記』も「君を茨樹にたとへ我身を細子草（屎葛　筆者）になして云へる下句なり」とうけとっている。

もっともこの序詞に「作者の手腕」と認めている研究者もいる。例えば武田裕吉は

葛の類から、絶ユルコトナクを引き出してくる手段は、類型的であるから、ただ序詞の特珠性が、この歌の持つ個性の中心といふことになる。それは与えられた数種の物を、自然に近い形に処理したところに、作者の手腕が認められる。クソカズラのような名のものに興味を有するのは、この種の歌の通性である。そういう類のものが、歌に入りがたく難題になるとなす考え方があったのだろう。

（『増訂万葉集等註釈』）

といい、窪田空穂もまた題詠をうまくよみこなしたとしてこの歌を評価、作者を「歌才」ある人とした。

「数種」の題を与えられての題詠であろう。「苣茨」「屎葛」などは少なくともその題であったろう。歌材としては

特殊な物で、その意味では難題であったのを、無理なく、落ちつきある歌に詠みこなしている。歌才のある人だったのである。（窪田空穂全集第十八巻『万葉集評釈』六）

と評する。

「刺だらけの苞莢」と「名を聞くだけに臭い感じのする屎葛」とをもって序詞をつくっていることについてまさにその点に滑稽味があるとしながらも、「皇室に対する敬意を欠いてゐるといふ批評を、うけても止むを得ない」というけとり方をしていた鴻巣盛廣に対して、序詞とそれをうける句間の異和をおもしろいとうけとめているのは、今井郁子、高木市之助である。両氏は

「絶ゆる事なく宮仕せむ」などといふ真面目な下句の序として屎葛などを持ってたところに戯笑歌らしい興味がある。（『万葉集総釈』）という。

三

この歌は

高宮王の数種の物を詠む二首

の詞書の下

婆羅門の作れる小田を喫む鳥瞼腫れて幡幢に居り　（三八五六）

とともに収められている。

巻十六の構成については、前部に「伝説歌・宴席歌」をおき、中間部に「数種の物を詠める歌」、「戯笑歌」を配し、後部に「伝説歌・俳諧歌・職業歌」をおいた三部類としたり「昔男女の係恋の歌の群」、「様々な男女の戯笑歌の群」、「諸地方の民謡、芸能的歌の群」の三群とする説がある。その表現はいろいろだが三群にわかれているという点で諸説とも共通している。

「高宮王の数種の物を詠む二首」は、この三群の中間部に位置する「数種の物を詠める歌」、「戯笑歌」群の中におかれているものである。

「数種の物を詠む歌」は高宮王の二首の外、長忌寸意吉麿の八首をはじめ、忌部首（黒麿？）、境部王、作者未詳歌、姓名未詳婦人、姓名未詳右兵衛の各一首、計十四首である。長忌寸意吉麿だけは他の巻にその歌をみることができるが、他は姓名すら明らかでない者ばかりである。高宮王、境部王の二人の皇族もその出自はさだかでない。

「数種の物を詠む歌」は、「夜漏三更」にわたる「衆集宴飲」の席で作られた。それらの歌の左注に、その場を「衆集ひて宴飲しき」とか「府家、酒食を備へ設け、府の官人等を饗宴す」と示している。そうした席で「酒酣にして」「衆諸」は一座の中の「歌作の芸に多能な」人物に、さまざまな素材を投げ、それらを詠み込んで歌を作れと迫る。その人物は「即ち声に応じて」作歌した。長忌寸意吉麿はわけてもそうした歌を即座に作る「曲芸師」であったと評されている。[注3]

そうした「歌作」の名手は、「衆諸」の要求に応じて異質、

無関係なものをいかに連関させ一首のなかに取り組むかという即興性と機知、遊戯性が必要である。そのことにおいて「種々の物を詠める歌」につづいて収録されている「嗤歌」（戯笑歌）と共通する性格をもっている。早くからこれらの歌に注目し、その特性を論じている西角井正慶氏が「種々の物の名を詠める歌と、人を嗤ふ歌」とを合して、「難題」と「戯笑歌」に大別、ここでとりあげた高宮王の二首を「戯笑歌」として扱っているのもそこからくる。[注4]

万葉集の中で巻十六がきわめて異質な巻であることは早くから諸家によって説かれている。その一部が歌物語の先駆となり、一部が『古今集』の「物名歌」、「俳諧歌」となり、のちの「狂歌」へつながるとし、一部は「連歌」の先駆と位置付けられてきた。

近来、「種々の物の名を詠める歌」や「嗤歌」の実態と、それを生みだした場、作者たち、特に代表的作者長忌寸意吉麿に関して、またそれらすべての背景となる時代と無名・下層官人層の姿が、中西進[注5]、伊藤博[注6]、渡部和雄氏[注7]らによって明らかにされつつある。

渡部氏は巻十七以降に示されている「家持中心の抒情の方向」を「律令感情」とよび、巻十六はそれに「素直に安住できない人々のうごめき」を示すものだと捉える。屎葛の歌についても「莨莢に延ひぼとれる屎葛」の上三句は「昼間の律令官人性の拒否としておったろう。」とし、それを許す場が「夜漏三更酒宴」であると指摘する。

しかし渡部氏はそれが「一首に仕上げられるのと同時に」「短歌形式、律令感情の下に覆われてしまった。上三句と下二句の異質を結ぶことの中に、律令官人の感情がある。ここには存在への憎悪など顔をのぞかせていない。ただの宮仕への序でしかない」という。私は渡部氏によって大いに啓発されたが屎葛の上三句が「ただの宮仕への序でしかない」には同じがたい。上三句と下二句の異和があまりにも大きくて笑わずにはおれなくなるのはなぜなのだろう。たしかに「憎悪など顔をのぞかせていない」。しかし哄笑はある。それは

降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか

という宮廷人の昼の誓言、儀礼歌を打ちくだくことはできなくても笑いのめす位の力はあるのではないか。

注1　西郷信綱『古事記注釈』第三巻

2　土橋　寛・小西甚一校注『古代歌謡集』

3　伊藤　博「長意吉麻呂の物名歌」（『万葉の歌人と作品上』）

4　西角井正慶「俳諧歌とその作者」（『万葉集大成』9）

5　「愚の世界―万葉集十巻の形成―」（『国語国文』三六巻五号）

6　4と同じ、伊藤　博「由縁有る雑歌―巻十六の論」（『万葉集の構造と成立』下）

7　渡部和雄「屎のある歌」（五味智英・小島憲之『万葉集研究』第八集）